

観念的貨幣尺度説の取り扱いをめぐって

結城剛志（埼玉大学）

I 計算貨幣論をめぐる動揺

貨幣とは何か、この問いは古くて新しい。アリストテレス以来の経済学史上の難問はマルクスの価値形態論によって明らかにされ、貨幣の本質をめぐる論争に一旦終止符が打たれた。ところが、商品貨幣論と呼ばれるその立論は、古典派の立論と本質的に区別されるべき形態論的な展開への無理解と商品 commodity の語感とも相俟って様々な誤解を生み、貨幣論としての妥当性が疑われる。とりわけ、マルクス、および、マルクス派の立論に正面から挑戦してきたのは、シュンペーター、ケインズ、そして、ポスト・ケインズ派と呼ばれる表券主義的な貨幣論者の一群である。本報告では、さしあたり、表券主義を国定貨幣と計算貨幣の合成概念と理解しておく。

貨幣学説を包括的に整理した Schumpeter [1996] の分類によれば、名目主義には、表券主義、国定貨幣論、計算貨幣論、等々が存在し、金属主義には、物品貨幣論、商品貨幣論、等々が配置される。ポスト・ケインズ派はこの分類にしたがい、国定貨幣と計算貨幣を一对の概念と理解している。しかし、計算貨幣自体は、国定貨幣にも商品貨幣にも接合しうる概念である。本報告の関心から整理し直せば、計算貨幣論は価値内在説と価値不在説とに分類した方が明瞭である。

ポスト・ケインズ派による批判は、マルクスの商品貨幣論を労働生産物の交換過程から説かれる物品貨幣説、もしくは、金属主義ととらえ、そのような貨幣理解では現代の不換銀行券制度を理解できない、というものである。

たしかに、物々交換における間接交換の手段として貨幣を説く古典派—新古典派の貨幣論では物品が貨幣であると理解されているし、Marx [1962] だけでなく、流通形態論に貨幣論を展開した宇野 [1964] においても、金属主義的に解釈できる記述が散見される。とはいえ、的確に論旨を追えば、商品と物品とは異なる概念であることが分かる。

したがって、マルクスの貨幣論が金属主義に基づくという解釈が適当ではないことを示すことはそれほど難しくはないだろう。だが、マルクスの計算貨幣論にたいする批判的文脈が他学派による商品貨幣論の理解の妨げになっているように思われる。計算貨幣論を「ばかげた理論」(Marx [1962] p. 111) と断じるマルクスの所説から名目主義的な貨幣論の片鱗を読みこることは著しく困難であるためだ。ただし、マルクスが否定したのは価値不在の計算貨幣であり、計算貨幣を全面的に放棄したわけではない。この点については、古谷 [2003]、泉 [2004, 2009] によって明らかにされているように、ステュアートの計算貨幣論を価値と完全に分離された観念的な価値尺度説ととらえることは誤りである。マルクスが期待するような意味での価値（労働実体）が名指されていないとしても、ステュアートの計算貨幣は金銀から切断されたものではない。もっとも、価値不在説が国定貨幣論に基

づかなければならないことは明らかである。

計算貨幣論では三重の問題が争われている。計算貨幣において尺度としての価値を認めるか否か、その価値を労働実体に見いだすか否か、という価値内在説における問題と、まったく価値の内在性を認めない「純粹に抽象的な計算貨幣」(Ingham [2004] p. 40) を主張する立場とである。

近年のステュアート研究における計算貨幣論への着目とポスト・ケインズ派による計算貨幣論への注目がほぼ同時期に高まり、実物的な貨幣論の妥当性にたいする名目的な貨幣論からの疑義が提示されるようになってきていることには相応の理由がある。物品貨幣論に基づく信用貨幣論の論脈で一貫して説明できるのは金本位制下における兌換銀行券までであり、その後に確立された不換銀行券の説明体系としては理論的な位相が異なっている。個々のケースにたいするアドホックな対応に満足せず、貨幣・信用論としての一貫した説明を求めるのであれば、従来の貨幣・信用論を再構築しなければならないとする動機があることには同意できよう。

1797年の銀行制限法によるイングランド銀行の兌換停止は、貨幣の本体を金であると信ずる理由を著しく損なわせた。1821年の兌換再開までの20余年の月日は金本位による通貨量の管理を不要ならしめたように見えた。無準備ではないが不換下でも銀行券がつつがなく流通し、金地金の市場価格が示すポンドの価値が度量標準から恒常的に乖離していたことが、そのことの証左であるように思われたのである。翻って、紙幣そのもの、あるいは、何かもっと抽象的なものが貨幣の本体なのではないかと想像させるには十分であったといえる。

このとき、不換下での貨幣をどのように理解すべきなのか、という問題が頭をもたげる。金兌換を銀行券流通の本質的な条件とする金属主義的な貨幣観を根底から覆すからである。その後、兌換再開と国際金本位制の確立によって金貨幣にたいする疑念は一時的に薄らぐが、1973年の変動為替相場制への移行にともなう不換銀行券は経済学にふたたび貨幣の本質をめぐる動揺をもたらしている。

その際、マルクスは、不換下での銀行券流通を擁護したアトウッドの計算貨幣論を「観念的貨幣尺度説」と呼び、その観念性を批判した。しかし、マルクスの「観念的貨幣尺度説」規定は必ずしも適当とはいえないものであり、Attwood [1819a, 1819b]の内在的検討を通じてその内実を明らかにすることは無意味であるとはいえないだろう¹。

II 観念的貨幣尺度説なるもの

マルクスは『経済学批判』にて計算貨幣論に言及し、「貨幣の観念的度量単位説」(Marx [1961] p. 60) をステュアートに代表させ、「観念的貨幣尺度説」(ibid.) をアトウッドに代表させているが、個々の論者にまつわる細かな論点を無視すれば、「計算貨幣は必ず価値

¹ 紙幅の都合上、先行研究の紹介は割愛せざるをえない。さしあたり、貨幣的アプローチによるバーミンガム学派研究としては西沢 [1994] が最も徹底している。

尺度を前提する」(酒井 [1957] 104 頁) という酒井の解説が最も端的であり、それにもかかわらず、計算貨幣論者は価値のない尺度や、質や大きさのない計算単位を想定している点で「ばかげた理論」といわなければならない、というのが基本的な理解である。

まず、マルクスはステュアートやアトウッドらの計算貨幣を価値や質のない尺度単位と想定している。いいかえれば、労働実体や商品経済との関連性を無視した計算単位を想定している点で観念的であると考えた。それにたいして、計算貨幣とは価値尺度を前提するものであり、価値の実体は労働によって形成されるものである。したがって、価値を量るのは貨幣商品——たとえば、金——に対象化されている労働である。ただし、主体が商品の価値を実際に評価する場合には、比較対象である商品と現物の金を並べて比較する必要はないのであり、価値表現に限っていえば想像上の金で事足りると述べた。これがマルクスのいうところの計算貨幣である。換言すれば、価値尺度を前提しない計算貨幣と価値尺度を前提する計算貨幣とがあり、後者のみが現実の貨幣を説明しうる、という整理である。

このように本来の計算貨幣論者の所説とマルクスの計算貨幣論とを対比させてみると争点は計算貨幣に価値や価値の実体としての労働を認めるか否かという点に集約される。しかし、ここにはマルクスの誤解がある。ステュアートにしてもアトウッドにしても、マルクスが批判しているような価値不在の計算貨幣を主張していたわけではない。ステュアートの計算貨幣論については既に古谷 [2003]、泉 [2004] によって十分明確にされていると考えられるが、ステュアートにおいてもアトウッドにおいてもマルクスと同様に計算貨幣とは想像上の金銀であることに変わりはないのである。もちろん、計算貨幣としての想像上の金銀の価値が如何にして決まるのか、という問いに的確に答えられていないとはいえ、価値のある商品がベースとなって計算貨幣が機能するという点で3者は一致している。

ステュアートとアトウッドの問題意識は、価値尺度たるべき現物の金銀、要するに、鑄貨が改鑄や摩滅による品位の不均一さから経済計算の手段としての用をなさず、実際の計算においては観念的に存在している適切な品位の鑄貨を計算に用いるべきである、ということにある。マルクスと計算貨幣論者との相違は、無価値の計算貨幣を許容するか否かではなくて、その価値を労働に見いだすか否かにあった。

もっとも金を貨幣に用いるかぎり、その価値規定において労働との関連性を無視できない。マルクスは、1819年にアトウッドによって口火を切られた「観念的貨幣尺度にかんする論争」について「アトウッド自身の知識のほどは、尺度としての貨幣の機能にかんするかぎりでは、次の引用文のうちにあますところなく要約されている」(Marx [1961] p. 64) と述べ、『ジェミニ書簡集』(Gemini [1844] pp. 268-72) におけるエンダビーの所説をもって「観念的貨幣尺度のもうろうとした表象は消えうせて、その本来の思想内容が姿をあらわしている。金の計算名であるポンド、シリング等々は、一定量の労働時間にたいする名称であるという。労働時間が価値の実体であり内在的尺度であるから、そこでこれらの名称は、實際上、価値比例そのものをあらわすであろうという。言いかえるならば、労働時

間が貨幣の真の度量単位だ、と主張するのである」(Marx [1961] pp. 65-6)。そして、論争は「どの商品もみな直接に貨幣である」(ibid., p. 68) と理解し、投下労働量が直接に価値を規定すべしとするグレイの労働貨幣論に帰着する、という特異な解釈が提示されている。

そして、アトウッドに始まるバーミンガム学派からグレイの労働貨幣論に至る価値尺度論の系譜を、「単位の質」(Marx [1981] p. 660) を労働に求めた議論として評価するのである。アトウッドの所説はケインズ学派の管理通貨論の系譜で理解するのが一般的で、このような特異な読み込みは研究史にほとんど顧みられていない(Ingham [2004] p. 42; 西沢 [1994])。

エンタビーに先駆けてアトウッドが投下労働量による価値規定を明快に述べていたとは考えにくい、少なくともエンダビーが解釈しうるほどには労働との関連性には配慮されているのであり、そのことは結局のところ、マルクスが批判しているほどには商品経済から遊離した計算貨幣が展開されていたわけではなかったことを暗示している。

マルクス派にかぎらず「ステュアートの計算貨幣概念を、数的比率に還元されうる一定の大きさをもたない恣意的な比較点とみる見方は今日でもみられ」(古谷 [2003] 3 頁) するためステュアートの記述には解釈の余地があるのかもしれないが、それはともかく、マルクスが最も率直に「数的比率」型の計算貨幣論を語っている(Marx [1961] p. 63, Marx [1981] p. 659)。

もし、ステュアートの計算貨幣がマルクスの指摘するような内容であればたしかに観念的であり「ばかげた理論」であるといつてもよいかもしれない。しかし、「貨幣単位の標準を金銀の平均値に設定」したり、「1749 年のポンドの価値を確定」する「国家信用のポンド」を設定したりすることで「ステュアートは一定不変の大きさを持つものと説いている」とみなしうる(古谷 [2003] 3-4, 6 頁)。

そして、価値不在の計算貨幣論を展開しているはずのステュアートが「アムステルダムの銀行貨幣」を計算貨幣の例にあげていることにたいして、「これは流通鑄貨をその地金内容(金属純分)に還元することにすぎないのだから、まさに反対のことを示している」(Marx [1981] p. 662) と批判する一文はマルクスの誤解を端的に表しているといえよう。この文は「反対のことを示している」のではなく、むしろ、ステュアートの計算貨幣がポンド・スターリングの大きさを拡散させてきた不揃いな「流通鑄貨」を本来の「地金内容(金属純分)に」観念的に還元するものであることを表明しているのであり、マルクスが考えるような意味での観念的なものではないと考えるべきである。

III アトウッドの計算貨幣論

アトウッドの計算貨幣への言及は首相であるリヴァプール伯への書簡形式で書かれた

連作 Attwood [1819a, 1819b]に現れる²。第二書簡では計算貨幣の内実に重要な変更がみられるものの、アトウッドの学説の詳細な検討は本報告の範囲を超えるため指摘のみにとどめ、第一書簡に展開される計算貨幣論に言及する。

アトウッドは金地金の市場価格が度量標準から著しく乖離した状況下で金兌換を再開すればポンドの大幅な切り上げにともなう物価下落を引き起こすことを懸念し、むしろ、度量標準を市場価格に適合させることを求める。さしあたり、この段階では、度量標準と市場価格の乖離の修正を求めているのみであり、兌換再開そのものに反対しているわけではない。こうして提起されるのがアトウッドの計算貨幣論である。

このような度量標準の調整によって、債権者は前貸した金地金と同量の金を受け取ることができる。同時に、現行の貨幣制度との整合性を維持し、将来の貨幣減価という兌換流通の障害を取り除くことができる。こうして、ポンドは「真の度量標準」(ibid., p. 15)を獲得する。

アトウッドの計算貨幣とは、実際に商取引で用いられているポンドの価値を指し、それはポンドがその時点のレートで支配する金地金の量だというのである。アトウッドは、兌換停止後に価格体系が変化してきたことを繰り返し指摘することで、法的に決められたポンドの価値——要するに、度量標準で定められた金量——で計算している主体は存在せず、度量標準は計算貨幣として機能していないことを強調している。

計算貨幣としての金と現実に流通している金鑄貨を一致させるならば、旧平価での兌換再開時に予想されるような急激な調整を回避できるし、債権債務関係においては契約時の名目貨幣額が支配する金量を同一に維持できる、ということだ。

本節で言及されたアトウッドの計算貨幣論を簡単にまとめておこう。アトウッドは計算貨幣を *ideal* と *real* の対立、つまり、経済計算のために観念的 *ideal* に用いられている金と、実在 *real* の金鑄貨との対立としておさえている。そして、実際の商取引では観念上の金を用いられているのであるから、度量標準もそれに合わせるべきであると主張した。その意味で計算貨幣は現実的 *practical* であるといわれた。

金の価値は市場の評価で決まると言及されるのみであり、第一書簡から「労働時間が貨幣の真の度量単位だ、という主張」を読み取ることはできないが、「尺度の質」がないわけでもない。価値量は計算貨幣としての金量で直接に決まり、発券量は「実際の欲求」といわれる実需で決まるのであるから、金1単位が価値の単位である。このような貨幣理解は、金鑄貨が購買に使われなくなっても、金が計算貨幣(価値尺度)として機能するので金本位制にこだわる必要はない、という主張につながる。

IV 観念的貨幣尺度説の取り扱いをめぐって

「価値の観念的尺度の理論」(Marx [1981] p. 667) が生まれたきっかけは、債権債務関

² 第一書簡は1819年5月15日、第二書簡は1819年10月20日の日付で発行されている。

係において契約されているのは価値であり、債務者は契約時の価値を返済すべきである、ということにある。貨幣の名目額で返済した場合には契約時と返済時の価値が一致しないため、名目額とは異なる実質価値を常に表示するような「価値の観念的尺度」または計算貨幣が要求されたのである。ただし、価値量＝金重量と理解されていたため、同量の金が異なる価値を示すという問題は看過され、「貨幣の本位……は変更されるべきか否か」という問題に集約されたのである。ただし、そのことからポンドのような「計算単位として通用している名称」が「恣意的な比較点にすぎない」(ibid., p. 659) と解釈するのは読み込みすぎではないだろうか。

以上から、マルクスの計算貨幣論批判に起因する物品主義的な貨幣論解釈の妥当性は再考されてよいのではないか。計算貨幣論は国定貨幣論に接合しなければ展開できないということもないだろう。

参考文献

- 泉正樹 [2004] 「不換銀行券と計算貨幣」『社会科学論集』(埼玉大学)、第 113 号、37-57 頁
- 泉正樹 [2009] 「計算貨幣論におけるマルクスのステュアート評：価値概念の観念性について」『東北学院大学経済学論集』第 172 号、39-60 頁
- 宇野弘蔵 [1964] 『経済原論』岩波全書
- 古谷豊 [2003] 「ジェイムズ・ステュアートの計算貨幣論」『経済学研究』(東京大学)、第 45 号、1-12 頁
- 西沢保 [1994] 『異端のエコノミスト群像：19 世紀バーミンガム派の経済政策思想』岩波書店
- Attwood, T. [1819a] *A Letter to the Earl Liverpool, on the Bank Reports of the Committees of the Two Houses of Parliament, on the Questions of the Bank Restriction Act*. Birmingham: R. Wrightson.
- Attwood, T. [1819b] *A Second Letter to the Earl Liverpool, on the Bank Reports, as Occasioning the National Dangers and Distresses*. Birmingham: R. Wrightson.
- Gemini [1844] *The Currency Question. The Gemini Letters*. London.
- Ingham, G. [2004] *The Nature of Money*. Cambridge: Polity Press.
- Marx, K. [1981] 'Ökonomische Manuskripte 1857/58, Teil 2'. *Karl Marx, Friedrich Engels: Gesamtausgabe (MEGA), 2. Abteilung: "Das Kapital" und Vorarbeiten*, Band 1. Berlin: Dietz.
- Marx, K. [1961] 'Zur Kritik der politischen Ökonomie', *Karl Marx - Friedrich Engels Werke*, Band 13. Berlin: Dietz Verlag.
- Marx, K. [1962] *Das Kapital, Band I, Karl Marx - Friedrich Engels Werke*, Band 23.